情おこりてやまず」とあるのに同じで、一年を隔てた文章とは思えないからである。

「序」のなかで最も脚色されていると思えるのは最後の部分である。二十六日午前三時に作り終えた詩を書記に託し、直文ら三人は一眠りする。昼間は直文ひとり歌舞伎座におもむき夜に帰宅。すでに清書が終わっていた作品を三人で読みあわせた。その後、直文は「くらき燈火のもとにて」序を書き終えるという部分である。

こうしてできたての原稿は二十九日に国語伝習所から発行される。

『騎馬旅行』の特徴は、福島の旅の終わりを見届けていることだ。最終章「またの一」で、

遠しと聞きしうまやぢも
みな尽きはてて六月の
はじめつかたにつきにけり
浦塩斯徳その浦に

とウラジオストックに着いたことを歌い、

われけふここを船出して
その山見むもあすあさて

と、日本に向けて出航し、懐かしい山容を夢想するとロマン的な場面を歌い上げる。

五月刊行の『探検軍歌』は、記録を重視し、日付・行程は具体的で、読者は福島の旅を追体験できるようなしかけになっている。創作の面では直文に対抗できないにしても、先行作品として一番まとまっている。内心は早く書きあげたかったとしてもウラジオストックに着いた六月十二日を確認し、福島の胸中、帰国の感慨をいれ結びとしなければ一巻の首尾は整わなかった。

ⅳ「波蘭懐古」

「波蘭懐古」となる『騎馬旅行』「その三」の全文はつぎの通り。

「ひと日ふた日は晴れたれど／三日四日五日は雨に風／路のあしさにのる駒も／ふみわづらひぬ野路山路／雪こそふらねさえかへる／あらしやいかにさむからむ／こほりこそはれこのあした／霜こそおけれこのゆふべ／独逸の国もゆきすぎて／露西亜の境に入りにしが／さむさはいよよまさりつつ／ふらぬ日もなし雪あられ／さびしき里にいでたれば／ここはいづことたづねしに／聞くもあはれやそのむかし／ほろぼされたるポーランド／かしこに見ゆる城のあと／ここにのこれる石の垣／てらす夕日は色さむく／飛ぶもさびしや鷗鴉の影／栄枯盛衰世のならひ／そのことわりは知れれども／かくまで荒るるものとしも／たれかは知らむ夢にだに／存亡荒廃世のならひ／そのことわりをうたがはむ／人はひとたび来ても見よ／あはれはかなきこのところ／さきて栄えしいにしへの／色よにほひよ今いづこ／花のみやこのその春も／まこと一時の夢にして」

部分的に表現が重なる先行作品二例を挙げておく。まず福島の漢詩。

波蘭古都
惨憺風雲波蘭地　貔貅百萬勢縦横
玉楼金殿今安在　千古怨深瓦索城

（『福島将軍大陸征旅詩集』）

『探検軍歌』の「ワルシヤウの感慨」。

「斃れし義士の墳の地は／見るも哀れの草の原／亡ぶる際に数多き／義士の慨きは幾何ぞ／百計つきてその国と／ともに亡びし故地なれば／亡き国王の城のあと／亡き忠臣の墳の原／看るに涙の堰きあへで／慨きに果てしなくなくも／苔むす墓に水たむけ／世に亡き人を慰めり」。

ⅴ「波蘭懐古」が軍歌になるまで

堀内敬三は『日本の軍歌』で「福島中佐がポーランドを通過するところであるから「波蘭懐古」という題がつけられて豆本の軍歌集に載り、軍隊で盛んに愛唱された」